

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530912

研究課題名（和文）社会科ワークショップ型授業における「ふり返り」と評価方略の開発的研究
研究課題名（英文）Pedagogical Research on Learners' Reflections and Assessment Methods of Learning
Workshop Activities in Social Studies Lessons

研究代表者

江間 史明（EMA FUMIAKI）

山形大学・大学院教育実践研究科・教授

研究者番号：20232978

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、小中学校における社会科ワークショップ型授業を開発し、学習者の「ふり返り」の表現をもとに、活動的な学習を評価する方法を明らかにすることである。学習の評価は、学習の目標や内容にもとづく。ワークショップ的な活動は、どのようなタイプの学習者の思考を促すのか。本研究は、「対話理論」にもとづいて活動と思考の関連を明らかにし、活動と教育内容を結びつけた。そして、活動後の学習者の「ふり返り」を充実させるための言語技術を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is twofold: to develop and demonstrate learning workshop activities for social studies at Japanese primary and middle schools; and to propose tentative assessment and evaluation methods for workshop activities for social studies classes. An emphasis is placed on the analysis of verbal expressions used by learners considered, in the research, as a reflection of the activities. Dialogue Theory was applied throughout to clarify the relationship between the workshop activities and the learners' thoughts. The author tries to present a set of verbal tools for improving the learners' reflective expression.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：社会科教育、ワークショップ、ふり返り、評価、状況論的学習観、対話理論

1. 研究開始当初の背景

(1)ワークショップは、簡単に言えば、「参加体験型のグループ学習の方法」である。学校教育だけではなく、企業研修や社会教育、まちづくりなど、様々な現場で用いられている。

社会科の授業づくりには、開発教育や経済教育などの分野から、これまでワークショップ的な活動要素が導入されてきた。部屋の四隅やランキング、ロールプレイ、クイズなどである。中学校社会科公民教科書（東京書籍）

には、「ハンバーガーショップの経営者になってみよう」という活動がある。

(2)江間(研究代表者)は、これまで山形県内の小中学校の教員と協力し、ワークショップ型授業の単元開発に取り組んできた。

そこでは、次の2つの課題に直面していた。

①ワークショップ的な活動要素を導入すればよいという傾向が見られたこと。確かに活動要素を導入すれば、授業は体験的になり、活性化する。だが、その時々活動の盛り上がりなどに依存するため、学習の水準が安定せず、教師の指導や評価が「子どもの関心を高めた」という点にとどまりがちであった。

②他方、教師が教育内容の習得を重視した場合、ワークショップ的な活動要素のあとに、教師が「まとめ」を行うことがある。ここでは、活動に参加した学習者個々の気づきや問いが、授業に位置づけられなかった。

(3)だが、こうした活動要素のある授業とワークショップ型授業は区別される。ワークショップ型授業は、「活動」+「ふり返し」というシステムを持つ「活動中心の授業」である。ワークショップ的な活動要素を導入すれば、それですむという話ではない。ワークショップ型授業の特徴は、次の2点にある。

①授業冒頭に、活動全体の「枠」を明示し、学習者の試行錯誤する活動(思考)空間をつくる。

②必ず「ふり返し」を書いて、活動での気づきを「自分の言葉で表現する」ことを求める。体験の学習化の局面である。

平成20(2008)年版の学習指導要領は、「活用を図る学習活動」を位置づけた。ワークショップ型授業による「活動」と「ふり返し」は、知識の「新たな学び直し」と言う点で、この「活用」の次元の学習を具体化したものと言える。本研究は、新教育課程の具体化に寄与することが期待された。

2. 研究の目的

(1)ワークショップの活動要素と学習者の思考内容(ふり返し)との関連の究明

ワークショップの活動要素は、そのタイプに応じて、学習者の試行錯誤の幅や気づきの内容に相異がある。例えば、クイズは、試行錯誤の空間が狭く、事実を関連づける思考を促す。他方、部屋の四隅は、参加者の思考の幅や揺れが、「コーナーを動く」という形で可視化される。判断の根拠を吟味していく思考を促すのである。

活動と思考の密接な関連は、「状況論的学習観」(J.レイブ、E.ウエンガー)において明らかである。この学習観は、学習を「実践コミュニティへの参加の度合い」とみる。実践コミュニティとは、①あるテーマに関する関

心や問題、熱意を共有し、②持続的な相互交流を通して、③その分野に関する知識や技能を創造・拡大し、交換し、保持する集団である。この学習観にたてば、学習にとって重要なのは、授業の中に、実践コミュニティを構築し、そのコミュニティへの参加を促すように、相互交流の場を編成することになる。

究明すべき課題は、ワークショップの活動要素が、実践コミュニティを支えるテーマや相互作用の構造とどのような関係にあるかを明らかにすることである。

これは、学習者に育てたい資質能力や習得・活用させたい教育内容と、ワークショップの活動の関連を吟味する基礎研究である。

(2)学習者の「ふり返し」の充実を図る言語技術の指導方法の解明

ここでの目標は、学習者が「自分の言葉で、その日の学習のふり返しを書けるようになること」「その表現内容を、より内省的で、次の学習につながる具体性を伴うものにする」ということである。そのための教師の手立てを明らかにする。特に、教師が「ふり返し」の際に問いかける指導言のあり方に焦点をあてる。

(3)上記の(1)(2)を統合した単元の開発と評価方略の構築

以上により、ワークショップの活動と学習者の思考を関連づけ、「ふり返し」の表現から、学習を評価する単元を開発する。小学校では、「廃棄物の処理」(ごみ)、中学校では、近現代史学習、政治学習の単元を事例としてとりあげ、実験授業を行い、ワークショップ授業の教育効果を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)活動と思考に関する先行研究の検討

ワークショップの活動と学習者の思考との関連を究明するために、活動学習理論などの学習科学や、言葉と経験に関する理論(分析哲学、プラグマティズム)などの先行理論を検討する。あわせて、「ふり返し」の表現を分析する枠組みを構築するために、議論の論理性分析の研究を検討する。

(2)小中学校での社会科ワークショップ型授業の単元および評価方略の開発

小中学校での単元開発と実験授業をすすめる。授業中および授業後の学習者の「ふり返し」の表現は、学習ノートとして単元を通して書き進めてもらい、デジタルカメラでデータとして蓄積する。授業は、ストップモーション方式の授業記録として考察を含めて整理する。

(3)ワークショップ型授業論を提唱した上條

晴夫氏（東北福祉大学）を招請し、研究会を年2回のペースで開催する。開発した社会科の単元について研究協議を行う。あわせて、研究成果は、日本社会科教育学会、全国社会科教育学会で発表し、批判的検討をうけるようにする。

(4)「ふり返り」の表現を重視し、学習者の自立的探究の形成に成果をあげている学校を訪問し、「ふり返り」を中心とする授業システムを調査する。富山市立堀川小学校、奈良女子大学附属小学校、諏訪市立高島小学校である。

4. 研究成果

(1)ワークショップの活動空間と学習者の思考について

①ゴミ減量ランキングの開発とその批判

社会科ワークショップ型授業は、ワークショップ的な活動要素を導入し、学習者が試行錯誤しつつ考える活動空間と位置づけ、ふり返りその体験を表現し、学習化をはかるものである。例えば、「ゴミ減量ランキング」（小4）の授業は、次のようになる。

単元は、「ゴミの分別に関心を持つ」ことから始め、「ゴミ処理場の見学」をへて、子どもが「ゴミ減量プラン」を考える。子どもが考えたことをもとに教師が6つのプランを設定。「どのプランが自分の家のゴミを減らし、そして、町全体のゴミを減らすことになるのか、その順位を決めます」と課題を示し、子どもが順位づけを行う。6つのプランとは、生ゴミの堆肥化、レジ袋をもらわない、トレイ返却、減量よびかけ、有料化、リユースである。子どものふり返りは、例えば、次のようなものである。

「ぼくは、最初はレジ袋だったけど、よびかけになって、またレジ袋になりました。[I君が]よびかけが最初でしょ[よびかけないと始まらない]と言ったので、なるほどと思ったからです。でも石油の話聞いて、レジ袋だと思いました。石油は、毎回くみ上げないといけないし、車も石油を使うからです」

ここで子どもは、ランキングの活動空間の中で、すでに学んだことや友だちの意見を聞いて、それを迷いつつ、関連づけている。これは、ゴミ発生抑制に関して、自分の知識を新たに生成したものともみることができる。

この実践について、池野範男は、次の2点で批判している（『教育目標・評価学会紀要』19号、2009）。

第1に、方法に特化している点である。池野によれば、「ゴミの授業は、減量プランの内容よりは、その選択する筋道と方法が問題になって」いる。そのため、「ゴミ減量をどうするのか、それはどのような効果があるのか、果たしてそれで社会のゴミがどれだけ減

るのかの現実的な効果やゴミ問題解決への貢献については全く取り扱われていない」点に問題があるとする。これは、活動空間の内容構成にかかわる課題の指摘と言える。

池野の第2の批判は、「教育内容と関連して活用が検討されていない」点である。池野によれば、「授業の眼目は、異なった領域やレベルにも適用・応用できる思考の道具を授業で準備すること」である。しかるに、「活用が方法に限定されると、社会科（中略）の内容は前提化され、その考察はなく内容の転位も図られず、適用、応用に留まる」ことになると言う。これは、活動を通して、子どもが学習内容をどのような水準で組みかえ、革新しているかを十分に示していないという課題である。活動空間での子どもの思考を、「試行錯誤」「関連づけ」と特徴づけるのでは不十分ということである。

②批判への応答と実践の修正

批判を受けたゴミ減量ランキングの授業について、次の2点で修正・再開発を行った。

第1に、ゴミ減量という問題の「内因性」「重要性」（山形市の現状と減量の緊急性）を示し、選択肢を「解決性」から再構成した。ゴミ減量という実践を、問題解決の文脈により明確に位置づけたのである。選択肢は、Aマイバッグ（排出抑制）、B分別・リサイクル、C焼却・熱エネルギー回収、D有料化である。

第2に、活動空間での子どもの思考を特徴づけるために、D.ウォルトンの「対話理論」を導入した。

ウォルトンは、対話における論証の基本的特徴を、「一方が、他方の発言を論証の前提としてとりあげ、推論をひとつずつ進めるなんかで、それらの前提を論証の中で使うことである」とする。こうした対話のタイプとして、ウォルトンは、6つあげる。説得、探究、交渉、情報探索、熟考、争論（個人的対立）である。このうち、熟考的対話とは、「ある行動をとる必要性」と「ディレンマないし実践的な選択」を対話の出発点の状況とする。対話参加者は、「直面する問題の解決に影響を与えるべく」「いくつかの目標や行為を順序よく整理すること」をめざして対話を行う。対話のゴールは、「最も役に立つ行為を選択すること」である。

ここで、ゴミ減量策の順位づけとその交流という活動は、この熟考的対話のひとつとして位置づけることができる。この活動空間での子どもの思考は、次のように整理できる。

- ・問題解決のための方策を、解決性の論理で順序よく整理できること。
- ・互いの発言を自らの論証のなかに位置づけ、より精緻な意見にできること。
- ・いくつかの次元の異なる社会的事象を統合的にとらえること。

以上の修正を加え、実験授業を再度行った結果、「ふり返り」の表現から、子どもの思考に4つのタイプを見出すことができた。

特徴的なのは、自分の関与する生活の次元と山形市の政策選択という社会の次元の双方に言及している思考が見られたことである。例えば、ある子どもは、当初、ゴミ有料化を選択して次のように言う。「ぼくがDを大切にしたい理由は、ごみの量が減っているから、ごみ袋を高くしてごみを減らすのはいいと思います。」この意見は、有料化後のごみの量（対前年比16%減）を根拠としている。話し合いでは、不法投棄や家計負担の増加の指摘を受けた。その後のランキングで、この子どもは次のように書く。「不法投棄の心配もあるけど、ごみの量はとても減っているからいいと思いました。」ここでは、不法投棄の懸念を組み込みつつ、それを上回るメリット（とても減っている）を明確にしている。一方、「ふり返り」では、この子どもは、次のように言う。「山形市のごみのことを考えて、今までやらなかったごみの分別をしようとして今日の勉強で思いました。」この子どもは、山形市全体の政策選択をしつつ、そこで生活する当事者としてできることも考えている。子どもの判断は、重層化している。

ここで、山形市という社会の次元の思考も見られた点で、ランキングに対する池野の批判に実践的に応えることができた。以上の実験授業の内容は、全国社会科教育学会（2010年10月31日）で発表し、本研究の着実な発展について、評価を得られた。

③対話理論の導入と分析

以上をふまえ、ワークショップの活動空間を学習者の思考にむすびつける理論として、「対話理論」の意義を検討した。例えば、ランキングという同じ活動要素でも、そのテーマや対話および対話参加者のゴールによって、熟考タイプと探究タイプがあることを、小5：稲作農家のランキングと、中学歴史：鎌倉幕府の滅亡理由ランキングを比較し、明らかにした。これは、活動要素の区分にもとづく従来のワークショップ型授業論を子どもの思考から整理し、「評価」を行う道筋を明らかにしたものと言える。

(2)「ふり返り」の充実を図る言語技術の司法方法について

①英語圏のライティング・ワークショップを社会科に導入することを検討した。「調べる綴り方」など、社会科学習と「書く」活動は密接に結びついてきた。ワークショップ型授業でも、「時代なぞかけ」のような表現系の活動や、「ふり返り」で学習者は書く活動を行う。これに対して、ライティング・ワークショップは、「作家のサイクル」という「書

き続けながら学ぶ」というシステムを持つ。

アメリカの小学校では、社会を扱うリサーチ・ワークショップに、このライティング・ワークショップの手法を導入している事例がある。これと日本の実践事例を比較検討した結果、日本の場合、学習者の文体が、フィクション性の強いもの（物語的な文章）に傾斜する傾向が見られた。ここから、社会科学習においては、新聞記者やドキュメンタリーの文体を導入し、学習者の文体を構築するという課題が明らかになった。

②学習者の言語活動の論理性を充実させる手立てとして、トゥールミンの論証レイアウトに検討を加えた。このレイアウトは、主張、データ、論拠などの6つの要素による妥当な手続きが、論証には必要であることを示したものである。社会科学習では、従来、社会的な論争問題学習の分析に用いられてきた。

だが、本研究では、この論証モデルが、論争の当事者の一方の立場しか分析することができず、意見の相互作用の局面を十分に扱えないことや、当該の論争の埋め込まれている文脈を十分に評価できないことを示した。その上で、ワークショップの活動空間のような、相互作用の局面では、「主張、根拠、理由づけ」の3点セットを協同的に用いることが学習に有用であることを、明らかにした。

③「ふり返り」を授業システムに位置づけている学校の取組のうち、奈良女子大学附属小学校の「めあてーおたずねーふり返り」のシステムを検討した。導入期の1年生の学級でのコミュニケーションの事例を年3回継続的に調査し、その変容を分析した。

この結果、質問（おたずね）するというコミュニケーションの行為が、対話の活動空間におけるコミットメントを生み出す機能を持つことや、このシステムの中で、子ども一人一人が自分なりに学習に向かう学びの自立傾向を形成していることを明らかにした。

(3)単元と評価方略の開発について

ワークショップ型授業は、着実に実践事例を積み上げてきている。すでに(1)で示したような批判に回答しつつ、他方で、片上宗二『「社会研究科」による社会科授業の革新』（風間書房、2011）では、社会科の意思決定学習を革新する授業モデルのひとつとして評価をうけている。本科研費の研究報告書には、次の事例をおさめている。

【小学校】

「ゴミ減量ランキング」「沖縄と北海道、選んで『思い出作文』」「稲作農家活性化ランキング」「対話型ギャラリートークで戦争学習」

【中学校】

「世界各地への弁当出店プロジェクト」「和

歌であらわす奈良時代」「ヒーローインタビューバトル（中世編）」「治安維持法の制定理由ランキング」「君は総理大臣、予算配分ワークショップ」「部屋の四隅で、義務投票制の導入を考える」

ワークショップ的な活動による学習の水準を安定したものにするためには、活動空間をより精緻にデザインする必要がある。そのために、今後、協同学習の手法を導入していくことが課題となっている。

(4) 今後の展望

ワークショップの活動による学習者の思考を評価するには、活動空間での子どもの思考を明確にし、評価の枠組みとなる目標や内容を明らかにする必要がある。本研究は、「対話理論」(D. ウォルトン) をベースに、活動と子どもの思考との関連を整理できることを明らかにできた。

だが、その分析対象は、ランキングなどのいくつかの活動要素による授業事例にとどまっている。今後は、本研究をもとに、ワークショップ的な活動要素を、子どもの思考にそって整理・分類し、「活動中心の授業」における目標と評価を、体系的に明らかにすることが課題となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 江間史明、社会科ワークショップ型授業における子どもの思考の分析、日本社会科教育学会全国大会発表論文集、査読無、第7号、2011、174-175
- ② 江間史明、よい教材とはいかなるものか、悠+(ぎょうせい)、査読無、28巻6号、2011、20-23
- ③ 江間史明、学習に向かう生活と「おたずね」、学習研究、査読無、449号、2011、24-29

[学会発表] (計3件)

- ① 江間史明、社会科学習における論証と対話、日本教育方法学会、2011年10月2日、秋田大学(秋田県)
- ② 江間史明、社会科ワークショップ型授業における教育内容の再編成、全国社会科教育学会、2010年10月31日、同志社大学(京都府)

[図書] (計3件)

- ① 全国社会科教育学会、明治図書、社会科教育実践ハンドブック、2011、73-76(分担執筆)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

江間 史明 (EMA FUMIAKI)

山形大学・大学院教育実践研究科・教授

研究者番号：20232978